

疑惑の偽名著者

キルケゴールは、その短い著作活動の期間におびただしい著作を刊行した。それらの多くは偽名で著されたものである。著作中の登場人物、執筆者、著作者、編集者、刊行者を含めると、十指に余る偽名が二重三重に組み合わされ、手の込んだ構成になっている。例えば、『あれか、これか』(1843年)では、ヴィクトル・エレミタなる人物が、古道具商で購入した机の未知の引き出しから偶然発見した手記を刊行した形になっている。ところがその2年後の『人生行路の諸段階』(1845年)では、彼を含む他の偽名著者たちによる「饗宴」の様子が描かれていたり、かと思えば湖底から引き揚げられた秘密の日記が収録されていたりする。これら雑多な原稿類を、ヒラリウスという製本業者が合本にして出版したのがこの本なのである。

もちろん、キルケゴールが自分の名前を出した著作(いわゆる建徳的講話を含む宗教的著作など)もある。彼自身は、“実名”で刊行されたものこそ、自分の真の思いを著した著作だと述べている。しかし、読者はそれをあまり真に受けないほうがよい。なぜなら、彼が他ならぬ自分自身のために書き残した、これまたおびただしい『日誌』の中にも、後世の人々が読むだろうことを想定して巧妙な編集が施されており、何が彼の“本音”なのか、あるいは何が“事実”なのか判然とさせない仕掛けになっているからである。まして公刊された著作は、偽名・実名にかかわらず、そのそれぞれについて慎重な作品論的分析が必要になるのは当然なことだろう。

我々は、それらの^{きくごう}作物を一切合財含めて、キルケゴールの作品と呼ぶ。そのとき「キルケゴール」とは、これらを著した著者たちの総称ともなる。しかし、キルケゴールと呼ぼうが、キルケゴールと名指そうが、この“実名”が果たして Søren Kierkegaard (1813-1855) という歴史上の人物と重なるかという、そうとも言えないのではないだろうか。デンマーク語の発音に近い形で記せば、「ソェーアン・キャケゴー」として生きたあの 19 世紀前半のデンマーク人が、我々読者の前に現れている「キルケゴール」とぴったり同一の人物なのかと言うと、どうしても疑問符が生じてしまう。「偽名著者には自分の言葉は一つもない」とキルケゴールは“実名”で述べている。しかし、生身の人間ソェーアン・キャケゴーは、実は思想家・著作家キルケゴールのさらに背後に立っているのである。

我々は、キルケゴールを知ることができるだろう。しかし、ソェーアン・キャケゴーは永遠に謎のままである。それは、ジョン・スミスや山田太郎と呼ばれる者の本当の姿、その人格の内奥は誰にも知られないのと同じ意味である。とすれば、キルケゴールという“実名”著者もまた、彼の数多くの偽名著者のメンバーの一員だと見做しても良いのではないだろうか。キルケゴールの「分身の術」は、もしかしたら自分自身の“実名”をも分身として巧みに立てていて、読者はまんまとその術策に掛かっているのかもしれない。

インターネット上の“水平化”現象

21 世紀の現代、インターネット上において、我々はブログや掲示板やツイッターなどに実名著者や偽名著者が氾濫してい

るのを見る。一人で何名ものハンドルネームを使い分ける者がいるかと思うと、男性が女性の名前を、女性が男性の名前を使っていたりする例もある。キルケゴールは『現代の批判』(1846年)で後世の大衆社会を予見したが、彼の批判はヤスパースをしてあたかも昨日書かれたようだとおぼしめた。その大衆社会の有りようは、20 世紀初頭のヨーロッパ社会の状況であった。しかし、その後さらに百年近く経った、21 世紀初頭のグローバル社会の状況はどうであろうか。

キルケゴールによれば、大衆社会(彼は公衆 Publikum という言葉を用いている)は新聞ジャーナリズムが助長するという。そこでは、あらゆるものを低次の水準に平等に置く“水平化 Nivellering”の現象が猛威を振るっている。しかし、水平化の主はどこまでも公衆である。彼らは無名で書くだけでなく、自署までして無名で書く。公衆は全国民、いや全人類を包括しているかのように見えるが、実のところ人間はだれ一人としてそこに関与していない。その意味で公衆とは一切にして無なのである。一方、今日のインターネット時代では、だれもが本名もしくは匿名で自由に意見を発信できるようになった。しかしながら、その精神構造はまったく同じ、いやむしろ水平化の勢威がますます浸透してきたとも言えるのである。

サイバー空間の向こう側にいるのは

公衆とは、巨大な蜃気楼のような存在である。今風の言葉でいえばバーチャルな存在だと言ってもよい。しかし、恐ろしいのは、そこに一頭の犬が飼われていることだ。傑出した人物が現れようものなら、公衆はよってたかつてこの犬をけしかけ、嘯みつかせ、自分たちと同じ水準に引きずりおろそうとする。これが水平化の勢威にほかならない。そして、嘯みついたのは犬だと言って、公衆は責任を取らない。公衆は巨大な幻のだから、責任など取れないのである。まるで、現代のインターネットにおける“炎上”騒動を予言しているかのようではないか。

だが、我々はサイバー空間の向こう側に、生身の体を持った人間がいることを忘れてはならない。それはいつの時代においてもそうである。そしてキルケゴール自身が、いや生身の人間であるソェーアン・キャケゴーが、同時代の公衆の犬に嘯みつかれてしまったのである。これが有名な「コルサル事件」と呼ばれるものである。『コルサル』(海賊船)という週刊新聞上に、ある日突如として、彼の姿が奇怪なポンチ絵として描かれ、愚劣な記事によって立て続けに嘲弄された。この事件によって彼の平穏な日常生活は一変し、まるで殉教のようになってしまった。街を歩いても、人々が袖を引いてくすくす笑い、子供たちが「『あれか、これか』がやって来るよ」と嘯し立てるので、彼は今までのように人々と親しい会話もできなくなってしまった。実はこの事件こそが、彼をして『現代の批判』を書かしたとも言えるのである。

名前はいくらでも分身の術がきくが、生身の体はだれもが一つしか持たない。サイバー空間の中で実名偽名によるお喋りが延々と続き、人間の水平化現象が進行する昨今である。しかし、我々だれもが生身の体を持った一人ひとりの人間であるという現実、断じてバーチャルなものではないのである。